

2009年12月  
第3回国際シンポジウム

木村周平  
東南アジア研究所 G-COE 特定助教

セッション4：解析手法におけるスケールとスコープの再検討

第4セッションは、学問横断的な対話を通じ専門性によって規定された問題のスケールとスコープを再検討することを目指した。最初の発表者である東南アジア史の大家アンソニー・リード氏（東南研客員）は、従来の歴史学の語りに地球圏の長期的な周期運動としての津波についての知見を取り入れ、スマトラ島の人口分布の偏りという謎に対し新しい解釈を示した。次に、小泉都氏（地球研）がリンネの分類法とカリマンタン島の先住民プナンの民族生物分類の比較を通じて自然科学の営みの特徴と問題点を明らかにし、環境問題のような領域横断的な問題に取り組むためには社会科学が自然科学と市民をつなぎ、協働を可能にすることが重要であると主張した。三番目にサンガ＝ンゴイ・カザディ氏（立命館 APU）が、リモートセンシングから得られた降水量や植生などのデータを重ね合わせて分析することで、東アフリカのヌーの移動を予測する研究について報告した。そして最後にシン・チュウ氏（フンボルト州大）が、世界史上の暗黒時代を、自然と文化の相互作用としてのシステムの危機として分析した。このように発表者はいずれも、専門分野によって規定されたスケールとスコープの限界に挑戦し、新しい視野を提示した。討論部では、それぞれの報告が新しく開いた視座と同時に、それによって見えなくなっているものを検討しながら、多様なスケールとスコープを意義ある仕方で行き来するための研究方法について議論した。